修士論文要旨

不安喚起の有無による視覚記憶の検索の差異の検討

Examination of the effect of anxiety on visual memory retrieval

樋上　巧洋（Koyo Higami）　　指導：鈴木　伸一

【問題・目的】

不安症に対する治療として効果が期待されている認知行動療法において，歪んだ情報処理過程は治療効果を阻害している要因とされているが（Hertel & Mathews, 2011），認知過程の１つである記憶と不安の関係については，未だ明らかにされていない。また，従来の研究では，不安を特性的な傾向としていたが，状態としての不安感情が記憶処理に及ぼす影響も指摘されている（尾形他, 2008）。そこで，本研究では，Eden et al.（2014）の手続きを用いて，状態不安の喚起の有無が記憶に及ぼす影響について検討することを目的とした。仮説として，状態不安が喚起した条件は，ポジティブな情報やニュートラルな情報の記憶成績は状態不安が喚起していない条件よりも低下するが，ネガティブな情報の記憶成績は高いとした。

【方法】

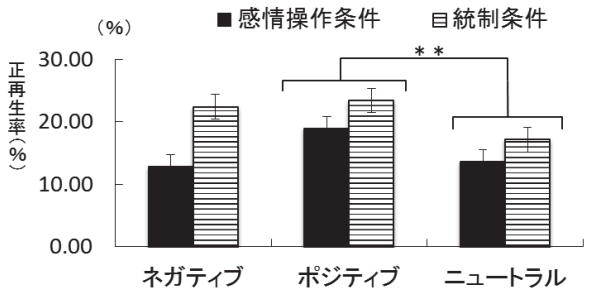
実験参加者：大学生・大学院生37名（男性12名，平均年齢23.19歳±3.59歳）が個別に実験に参加した。**測定指標**：①特性不安の測定:新版STAI日本語版（肥田野他, 2000），②状態不安の測定：Visual Analog Scale（VAS），③本研究で使用した実験刺激の妥当性の検討：無意味つづり語の感情価評定（「- ３：非常にネガティブ」から「３：非常にポジティブ」）。**不安喚起課題**：実験参加者のうち，無作為に状態不安を喚起させる条件（以下，感情操作条件）に割り振られた参加者は，実験の途中でスピーチを行うという教示を受け，その後３分間スピーチの内容について考えることが求められた。**統計的連合学習パラダイム（Eden et al., 2014）**：学習課題と記憶課題の２つの課題から構成されており，学習課題では，PC画面上に，画像と無意味つづり語がペアで呈示される。参加者は，ペアを見て，正しいペアの時にはスペースキーを押すことが求められた。学習課題終了後，妨害課題を行った後，記憶課題を行った。記憶課題では，学習課題で提示されたペアのうち，無意味つづり語のみが呈示され，ペアだった画像について報告してもらうことが求められた。**実験手順**：実験は，①質問紙回答（新版STAI日本語版，VAS，無意味つづり語の感情価評定），②学習課題，③不安喚起課題，④質問紙回答（VAS），⑤妨害課題，⑥記憶課題，⑦質問紙回答（VAS，無意味つづり語の感情価評定）の手順で実施した。**要因計画**：条件（感情操作条件，統制条件），画像刺激の属性（ネガティブ，ポジティブ，ニュートラル）を独立変数，記憶課題の再生成績を従属変数とした２要因分散分析を行った。

【結果】

各条件における記憶課題の成績の差異を検討するため，条件，画像の感情価を独立変数，再生成績を従属変数とした２要因分散分析を行った。その結果，画像の感情価の主効果が見られた（F (2, 52) ＝ 4.86, p < .05）。Bonferroniの多重比較の結果，ポジティブ画像の再生成績がニュートラル画像よりも有意に高いことが示された（p<.01；Figure 1）。しかし，条件による主効果や条件と画像の感情価の交互作用は見られなかった（条件の主効果：F（1, 35）＝ 2.21, *n.s.*；条件と画像の感情価の交互作用：F（2, 70）＝ 1.63, *n.s.*）。

【考察】

本研究は，状態不安の喚起の有無が記憶に影響を及ぼすのかを検討した。その結果，本研究の仮説は支持されなかった。その課題点として，不安対象と記憶対象の関連性がなかった可能性が考えられる。また，仮説以外の結果として，状態不安の喚起の有無に関わらず，ポジティブ画像の再生成績はニュートラル画像の再生成績よりも高いことが示された。状態不安が喚起の有無に関わらず，ポジティブな情報の記憶想起がなされやすいことが示されたため，本研究の結果が，不安時の情動調整の方略や（Joomann & Siemer, 2004），不安症患者への記憶バイアスの修正訓練（Vrijsen,et al.（2014）に関する基礎的な知見の一部となったと考えられる。



注. エラーバーは標準誤差，＊＊p < .01.

Figure 1　各条件における記憶課題の正再生率（%）